

あゆみ通信

VOL. 130

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

本願をききて疑う心 なきを聞というなり



加来雄之先生

(前略) 表記の言葉は、親鸞聖人が本願成就文の冒頭の句を解説する中に出ています。

「聞其名号」というのは、本願の名号を聞くとのたまえるなり。きくというは、本願を聞きて疑う心なきを「聞」というなり。また、きくというは信心をあらわすみ法(のり)なり。聖人は、「本願の名号をきく」を「本願をききて」と確かめ直しておられます。つまり、「きく」とは、ナムアミダブツと言う音を聴くことでもなく、また本願の名号についての教義を聴くことでもありません。「きく」とは、本願の呼びかけを直に聞くことなのです。その時に、本願に呼びかけられて在るという、疑うことのできない我が身の事実への目覚めが成り立ちます。そういう聞き方を「信心」と表わすのでしょうか。(中略)

私がこの頃「聞法」と言う体験が、法蔵菩薩の五劫思惟(ごこうしゆい)の追体験と言う意味を持っていないかを感じています。この人生において「無くてはならない生き方」「どんな運命によっても壊れない

生き方」を選び取っていく、そのような選択本願(せんじゃくほんがん)精神を学ぶところに「聞く」という態度の深い意味があるのではないのでしょうか。また、私たちは、その聞き取った精神を深く心に刻み、思いながら、悲哀や矛盾に満ちたこの世の中を証(あか)しつつ、生きていかななくてはなりません。それは法蔵菩薩の不可思議兆載永劫(ちょうさいようごう)の修行の意味を持つでしょう。

このように受け止めることによって、私たち一人ひとりの聞法生活は、法蔵菩薩の因位のご修行と言う意味を持ってくるのでしょうか。このような「聞く」ことの深い意味を回復していくことが今の時代にはとても大事だと思います。仏法を聞くということはどういうことでしょうか。またどのようにすれば本当に聞くことができるのでしょうか。そのことを私たちに語るのが「大無量寿経」です。「大無量寿経」は「聞」の一語に貫かれています。「大無量寿経」に説かれる法蔵菩薩の物語は「聞く」ことを課題とした宗教的魂の物語だと言えます。私たちの前に「聞く」ということを確かめ証してきた歴史が存在していることは本当に有難いことです。

(加来雄之〈かくたけし〉「真宗教団連合法話」2010年8月から引用)

第2組聞法会案内

今年、第2組最語の聞法会です。どうぞ、こぞってご参加下さい。

日時 10月5日(土)
午後2時

会場 西教寺(阿倍野区阿倍野元町)

講師 松井 聡先生

(第13組 心願寺)

参加費 500円

所長巡回終る



2019年8月
30日(金) 午後6時より、
天王寺区の下

安寺(海老海恵幸組長)で、所長巡回が、住職・坊守19名と門徒会から6名が参加して開催された。定年で退職の宮浦前所長に変わり、新任の大町慶華所長を始め、教務所スタッフ4名と別院職員が来訪。宗務所、教務所からの宗派経常費や教区費徴収とこれからの教区事業が説明され、各寺院の実情など容貌の聞き取り、の意見交換がされて終わる。

除災招福

80年近く、生きてきて、身に沁みついたものは、簡単には落ちないことを知らされる。節分の「鬼は外! 福は内」は文句なく子供達が大きくなるまで何の抵抗も無くやってきた。また、新聞やテレビでの「今日の運勢」も、ほんのこの間まで見ていた。教えられなければ、知らないうちに他人を傷つけていたことを思い知らされる。今になって気付かされるのは、少し聞法をしたから。ますます聞法に精を出そう。(本)

第2組聞法会報告



2019年9月7日(土) 午後2時より、残暑厳しい中を浪速区の唯専寺(木津御坊)を会場に、第2組聞法会「共に学ぶ『正信偈』」が、講師に新田修巳先生(平野区 正業寺)をお迎えし、組内の住職、寺族と門徒、推進員の24名が参加して開催されました。

今回は七高僧の3番目、曇鸞大師の「天親菩薩論註解 報土因果顕誓願 往還回向由他力 正定之因唯信心」についてお話いただいた。始めに仏教語は難しい言葉が多いが、日常の暮らし(生老病死)の中で話される言葉を「人間語」とすれば、本多弘之先生が使われるようになった「本願語」と言われる言葉は、浄土と言う領域が表現され、生老病死を受け取り、私と世界を本当につなぎ、聞法によって、この身のままで浄土に眼を開いてくれると。



休憩後は、往相・還相について、還相とはたとえば、これまで出会った全ての人々が今の私を育ててくれたと、御恩を深く感じることであり、往相とは、その御恩に報いる歩みとして、いのちを愛する生活が始まることである等々を、丁寧に話された。

如是我聞

細川克彦(佛足寺)

先生は「人間語」

とは日常の生活の中で、生老病死の中で使っている言葉である。

それはまた、娑婆と言う苦しみ

の中で、苦を逃れ、楽を求めている世界である。一方、「本願語」と呼ばれるものは、浄土と言う単に生老病死だけではない、私の知らない、広く大きな世界のあることを表現している。それはまた、この身のままで広い世界(浄土)に眼を開けてくれる。それは聞法で知っていくしかない。



先生はかつて、あるご門徒の奥様が亡くなられて、お葬式の導師を依頼されたことがあった。葬式の日取りを決める時にたまたま友引の日であったので、その人は親戚や子ども達の意見もあり、一日延ばしてほしいと言われた。そして、先生ならどうされますかと尋ねられたので、自分は友引だからとか仏滅だからと言って、葬式の日を変えることはしない。仏教では、そのようなことはどの經典にも書かれていないからと話され、ご家族でもう一度よく相談されたらいかがですかと言われたと。そうしたら、3時間ほどして

これからの行事は

各寺院の報恩講が開催されます。

●第2組報恩講

11月14日(木) 午後5時30分
即應寺(阿倍野区阪南町)
お勤めと法話、同朋総会も
講師 竹中慈祥先生(別院)
参加費 2000円(お斎料)

●あゆみの会 総会

12月22日(日) 午後1時30分
法山寺(阿倍野区天王寺町)
事業報告・計画、会計報告・
予算案、他。法話
講師 藤原智先生(法山寺)

その人から電話があり、よく相談した結果、友引の日で結構ですと返事をいただいた。そして、その人は、妻は子ども達のことを考えて、一所懸命に病を生き、また一所懸命に死んで行った。その死を何か悪いことのように考えるのは、おかしいと気付いたと。先生は、ご門徒さんは広い世界に出会われたのではないかと話された。

後半では、往相・還相について「還相」とは、過去を見据えていくとき、自分につらく当たった人のことも、その人が居られたからこそ今の自分があり、また、すべての人々や出来事のお陰であったと目覚めていくことが、頭が下がるということであり、その恩徳を深く感じる時、その御恩に報いていこうという、いのちを愛するという、浄土に向かう歩みが始まる。

聞法の場合は過去の自分をもう一度見つめ直していく場であり、そこでは、普段聞こえなかったことが聞こえてくる等々、分かりやすく話された